令和６年度

健やか親子21
内閣府特命担当大臣表彰

［功労者表彰］
［健やか親子表彰］

受賞取組の紹介

こどもまんなか
こども家庭庁

令和6年度

健やか親子21
内閣府特命担当大臣表彰

［功労者表彰］［健やか親子表彰］

健やか親子21内閣府特命担当大臣表彰について

趣旨

成育基本法に規定される成育医療等基本方針に基づく国民運動として健やか親子21が位置づけられている。
この国民運動の一環として、成育医療等基本方針の趣旨にのっとり、成育過程にある者の心身の健やかな成育並びに妊産婦の健康の保持及び増進に寄与する取組を推進している個人・団体・自治体・企業について、健やか親子21全国大会において表彰を行う。

〈参考〉健やか親子21内閣府特命担当大臣表彰実施要領▶
https://sukoyaka21.cfa.go.jp/wp-content/uploads/2024/07/sukoyaka21_award2024.pdf

健やか親子21

こどもまんなか
こども家庭庁

健やか親子21内閣府特命担当大臣表彰の種類

(1) 功労者表彰

成育過程にある者の心身の健やかな成育並びに妊産婦の健康の保持及び増進に寄与する取組に長年携わり、地域社会全体でこどもの健やかな成長を見守り育む地域づくりに貢献している個人及び団体を表彰するもの。

※令和6年度は個人48名、団体3が受賞

〈参考〉令和6年度内閣府特命担当大臣表彰プレスリリース ▶
https://www.cfa.go.jp/press/df2f9a91-0a27-4d03-a202-b87d4837e75f

(2) 健やか親子表彰

国及び地方公共団体が講ずる成育医療等の提供に関する施策に協力し、先駆的な取組により、成育過程にある者の心身の健やかな成育並びに妊産婦の健康の保持及び増進に寄与する自治体・団体・企業を表彰するもの。

※令和6年度は「小児の入院付き添いについて」を重点テーマとして公募

■最優秀賞・・・認定特定非営利活動法人キープ・ママ・スマイリング
■自治体部門　優秀賞・・・神奈川県横須賀市地域健康課
■団体部門　優秀賞・・・公益財団法人チャイルド・ケモ・サポート基金
■企業部門　優秀賞・・・株式会社松本山雅

表 彰 式

令和6年度健やか親子21全国大会（母子保健家族計画全国大会）

■日時：令和6年11月21日（木）10時30分～
■場所：宝山ホール（鹿児島市山下町5-3）

巻頭に寄せて

岡　明　埼玉県立小児医療センター病院長
健やか親子21推進本部　会長

このたびは、受賞された皆様、本当におめでとうございます。

さて、「健やか親子２１」は、関係者、関係機関・団体が一体となって推進する母子保健の国民運動として、平成13年より展開されてきており、令和５年度以降は、成育医療等基本方針に基づく国民運動として位置付けられ、医療、保健、教育、福祉などのより幅広い取組を推進しています。

この「健やか親子２１」の取組により、こどもの成長や発達に関して、子育て当事者である親や身近な養育者の方が正しい知識を持つことに加えて、学校や企業等も含めた社会全体で親やこどもの多様性を尊重し、見守り、子育てに協力していくことができるよう、国民全体の理解を深めるための普及啓発を促進しているところです。

また、この国民運動の一環として、成育過程にある者の心身の健やかな成育並びに妊産婦の健康の保持及び増進に寄与する取組を推進している個人・団体・自治体・企業を、「健やか親子２１内閣府特命担当大臣表彰（功労者表彰/健やか親子表彰）」として表彰しており、今年で2回目となります。

今年度、功労者表彰は個人48名・団体３団体の皆様が受賞となりました。

功労者表彰は、成育過程にある者の心身の健やかな成育並びに妊産婦の健康の保持及び増進に寄与する取組に長年携わり、地域社会全体でこどもの健やかな成長を見守り育む地域づくりに貢献している個人及び団体を表彰するものとなります。長年にわたり、このようなすばらしい取組を行ってくださっている皆様に改めて感謝の気持ちと敬意を表します。

また、健やか親子表彰は、国及び地方公共団体が構ずる成育医療等の提供に関する施策に協力し、先駆的な取組により、成育過程にある者の心身の健やかな成育並びに妊産婦の健康の保持及び増進に寄与する自治体・団体・企業を表彰するものとなります。

今年度は、重点テーマに「小児の入院付き添い」を掲げ、合計29件の応募がありました。そのいずれも、甲乙をつけるのに苦労するほど、優れた取組ばかりでした。

一方、こちらは次年度以降の課題としたいと考えておりますが、応募総数としましては少な目ではあり、素晴らしい取組をしている自治体・団体・企業は多数あると認識しておりますので、来年度は是非とも奮ってご応募いただきたいと思います。

今回の最優秀賞である「認定特定非営利活動法人キープ・ママ・スマイリング」は、こどもに付き添う保護者へ食事や日用品を届ける支援だけでなく、実態調査に基づく政策提言等で社会への発信力もある点が高く評価されました。その他の、自治体部門・団体部門・企業部門の優秀賞におかれましても、いずれも健やか親子２１の趣旨に沿ったすばらしい取組を行ってくださっています。

功労者表彰及び健やか親子表彰を受賞された皆様の取組が全国に横展開され、「すべてのこどもが健やかに育つ社会」がより一層、実現することを祈念いたします。

健やか親子21内閣府特命担当大臣表彰　受賞取組の紹介

― 目 次 ―

令和6年度　健やか親子21内閣府特命担当大臣表彰について …… 1

功労者表彰［個人］

田中 誠也 氏／坂川 真美 氏 …… 6
瀬戸 琴子 氏／清水 昱子 氏 …… 7
島田 百合子 氏／佐藤 達也 氏 …… 8
櫻井 裕子 氏／藤野 宣之 氏 …… 9
佐藤 良枝 氏／打出 喜義 氏 …… 10
小林 由枝 氏／見須 直子 氏 …… 11
花田 直樹 氏／羽根 靖之 氏 …… 12
岡本 美佐江 氏／郷原 寛子 氏 …… 13
沼田 朋子 氏／杉野 禮俊 氏 …… 14
岡畠 進 氏／百衣 万里子 氏 …… 15
原田 恵美 氏／横地 一興 氏 …… 16
佐藤 美由紀 氏／興梠 知子 氏 …… 17
屋良 朝雄 氏／德山 千登世 氏 …… 18
仙田 昌義 氏／鈴木 利人 氏 …… 19
齋藤 美貴氏／服部 律子 氏 …… 20
羽根 司人 氏 …… 21

功労者表彰［団体］

豊後大野市愛育会／北杜市母子愛育会 …… 23

健やか親子表彰

［最優秀賞］
認定特定非営利活動法人キープ･ママ･スマイリング …… 25

［自治体部門 優秀賞］
神奈川県横須賀市地域健康課 …… 27

［団体部門 優秀賞］
公益財団法人チャイルド･ケモ･サポート基金 …… 29

［企業部門 優秀賞］
株式会社松本山雅 …… 31

※受賞者取組の紹介につきまして、希望者のみの掲載をしております。

令和６年度

健やか親子21内閣府特命担当大臣表彰

功労者表彰［個人］

功労者表彰　受賞者の声

受賞者　田中 誠也

主要経歴　医師

［主要経歴までの略歴］

1981年産婦人科入局、1985年医学博士、1993年青森市民病院産婦人科部長、1996年田中産婦人科クリニック院長、2007年青森市産婦人科医会長、2009年日本産婦人科医会青森県支部長、機構改革のため2011年青森県産婦人科医会長、現在青森市医師会副会長

取組を始めようと思ったきっかけは何ですか？

青森市民病院に着任以来、小児科と協力して積極的に母体搬送や新生児の出迎え搬送に取り組み、産科医療の向上に携わったこと。また、開業以来10代の望まない妊娠や性感染症の防止の必要性を感じ、高校生対象の性教育にも産婦人科校医として参加し、活動を始めたことなど。

取組をどのように展開しましたか？

地域の産科医療や新生児医療の安全性向上に努めるとともに、妊婦健診のみならず子宮がん検診や乳がん検診にも取り組み、小学6年生からの子宮がん予防ワクチンの接種率向上に努める。産婦人科校医として性教育を通じて、低用量ピルの普及啓発と性感染症減少などに注力している。

今後の展望

青森県産婦人科医会や青森市産婦人科医会などの活動を通じて、地域に根差した診療を続け本県女性の一生に寄り添った産婦人科医療を提供するとともに、性教育を実施し高校生を中心とした思春期医療にも積極的に携わっていきたい。さらに性犯罪被害者支援にも協力していく。

功労者表彰　受賞者の声

受賞者　坂川真美

主要経歴　二戸市健康福祉部
健康福祉企画課
健康福祉支援センター　所長

［主要経歴までの略歴］

1988年　看護師免許取得

1989年　保健師免許、養護教諭免許取得後、看護師として病院勤務を経験。その後学校で生徒の健康管理を行い、保健所で幼児健診や訪問、相談業務を実施した。

1993年　二戸市役所に入庁し、通算約32年間母子保健事業に従事している。

取組を始めようと思ったきっかけは何ですか？

少子化や生活様式の多様化、地域住民との希薄化、虐待など母子保健の課題は多様化、複雑化している。そのため、誰もが安心してこどもを生み育てられるよう、子育て支援の充実や切れ目のない支援、相談支援体制を充実させることが必要だと感じ、事業を展開した。

取組をどのように展開しましたか？

「こどもたちも親も健やかに育つまち」を基本理念とした「にのへ結・遊親子21プラン」を策定した。また、地域の健康づくりサポーターや関係機関と連携を図り、その時代のニーズに合わせた方法を検討し、包括的に支援できるような体制を整え、切れ目のない支援を提供した。

今後の展望

母親が安心してこどもを生み育てられるため、次世代を担うこどもたちが健やかに育つためには、人と人とのつながりが大切だと思う。そのため、地域のつながりはもちろん、住民同士がお互いを思いやり、助け合う仕組みづくりが必要ではないかと考える。

功労者表彰　受賞者の声

受賞者　瀬戸琴子

主要経歴　保健師として長年にわたり母子保健に従事

[主要経歴までの略歴]

1978年保健師として七ヶ浜町に入庁。保健福祉課、子ども未来課など45年にわたり母子保健に従事。地域育児サークルの育成、療育支援施設の立上げのほか、2012年以降は専門職を総括する立場で保健・福祉・教育の各分野が連携した支援体制づくりに取り組みました。

取組を始めようと思ったきっかけは何ですか?

少子化・核家族化を背景に子育てに悩みや不安を抱え、日常的に助言・相談を必要とする子ども家庭が増えているように感じます。子どもへの愛着形成を促し、なにより子育てに喜びを感じてもらうために、身近な支援者として保健師の役割が求められていると感じています。

取組をどのように展開しましたか?

「東北一面積が小さな町」を強みに、全ての子ども家庭の状況把握のため日常的・定期的な相談支援の機会を創り、住民と保健師との顔の見える関係づくりを大切にしました。また、地域による子育て支援活動や親子交流の機会を増やすため、地域子育てサークルの育成に取り組みました。

今後の展望

小さな町だからこそ、保健師が地域のより深いところで活動でき、一時的な介入で解決しない問題を抱える家庭に対しても自立に向けた丁寧な支援が可能だと考えています。自分たちの支援がしっかり届くよう、今後も時代や地域に合った保健師活動のあり方を考えていきたいと思います。

功労者表彰　受賞者の声

受賞者　清水 昱子

主要経歴　秋田県在宅保健師等ゆずり葉の会

[主要経歴までの略歴]

昭和46年度より37年間県職員(保健師)として主に母子保健事業に係り、発達に課題のある幼児に対して「幼児教室」を開設する他、思春期保健対策として「ピアカウンセリング」を実施し、健全な青少年の育成に努めた。退職後も県立大学の非常勤保健師として若者の健康管理等に取り組んだ。

取組を始めようと思ったきっかけは何ですか?

母子保健事業に取り組む中、「幼児教室」では母親同士の学習会が育児能力が強化されることを確認できたこと。また、「ピアカウンセリング」を実施していく中で、話し合いをすることから課題を抽出して性に対する意識の向上に繋がること等が活動の原点となった。

取組をどのように展開しましたか?

「幼児教室」では遊びをとり入れた発達訓練等を県内の保健所で実施されるようになった。
「ピアカウンセリング」を県内の高校や大学で実施する等の展開が出来た。

今後の展望

先輩保健師として、秋田県在宅保健師等ゆずり葉の会の活動の一助になれば幸いです。

功労者表彰　受賞者の声

受賞者　**島田 百合子**

主要経歴　館林市役所保健福祉部
健康推進課長

［主要経歴までの略歴］
昭和62年4月 群馬県館林市役所に保健師として入職。保険年金課、健康推進課等で勤務し、通算25年以上母子保健行政に携わる。

取組を始めようと思ったきっかけは何ですか？

入職時より医療資源の乏しい当地域では予防対策が重要と考え、疾病予防対策に取り組むとともに、母子の健全な育成を図るためには子育て支援、仲間づくり等の支援が必要だと考えました。

取組をどのように展開しましたか？

本市では、伴走型相談支援が始まる以前から妊婦、新生児・産婦家庭訪問を全数実施しており、誰一人取り残さない支援を展開しています。また、子育て、仲間づくりを支援するために子育てサロン、多胎ファミリーサロン、祖父母教室、離乳食教室等を展開しています。

今後の展望

こども家庭センターを設置し、母子保健と児童福祉の機能が一体的に相談支援を行うことになるが、保健師の活動は全ての親子を支援し、地域と向き合いながら子育てしやすい環境を整えることだと考えます。今後も微力ながら尽力していきたいと考えます。

功労者表彰　受賞者の声

受賞者　**佐藤 達也**

主要経歴　埼玉県医師会 理事

［主要経歴までの略歴］
1987年東京慈恵会医科大学卒業 東京慈恵会医科大学小児科 国立小児病院感染科 慈恵医大柏病院小児科勤務
1994年佐藤医院(八潮市)継承
2002年草加八潮医師会理事
2008年草加八潮医師会副会長
2016年草加八潮医師会会長
2022年埼玉県医師会理事

取組を始めようと思ったきっかけは何ですか？

取組の1例をご紹介致します。2004年頃から埼玉県草加市（人口24万）・八潮市（人口9万）の医療圏で、小児科のベッドがある唯一の基幹病院である草加市立病院において、夜間に多くの小児救急患者が殺到し小児科医の疲弊が問題となっていました。

取組をどのように展開しましたか？

2012年4月、草加市立病院の敷地内に草加市が設置し草加八潮医師会が委託運営する1次救急施設を整備し、地域の準夜帯の小児1次救急患者（一部救急搬送患者も含む）をすべて受け入れ、2次医療が必要な患者のみを隣の草加市立病院に転送するシステムを構築しました。

今後の展望

2012年度から19年度の8年間は年間5000人台の小児救急患者を受け入れてきました。2020年のコロナ禍以降受診状況に変化が見られています。今後も地域のニーズを的確に把握し、夜間に小児救急患者がスムーズに1次・2次救急医療を受けられる体制を維持していきます。

功労者表彰　受賞者の声

受賞者　**櫻井 裕子**

主要経歴　**包括的性教育やプレコンセプションケアについての講演を年間100件以上実施**

［主要経歴までの略歴］

大学病院や産婦人科医院などでキャリアを積み、開業（出張開業）

著書に「10代のための性の世界の歩き方」時事通信出版局

一般社団法人埼玉県助産師会プレコンセプションケアプログラム普及啓発事業主任

一般社団法人”人間と性”教育研究協議会全国幹事

取組を始めようと思ったきっかけは何ですか？

私は自身の意図せぬ妊娠をきっかけに助産師になりました。助産師になってから妊娠出産育児絡みの困難事例や事件に触れ、包括的性教育やプレコンセプションケアが足りない現実を思い知りました。この現実に対して「自分にできることはなんだろう」と考え続けて今に至っています。

取組をどのように展開しましたか？

地域母子保健活動や看護/助産専門学校で非常勤講師を務める傍ら、講演活動に意欲的に取り組んできました。性教育は「幸せになるため」の学びです。子どもや若者たちが真面目に真剣に、そして楽しく「性」を学べる場を作りたい。そんな気持ちで25年包括的性教育をやっています。

今後の展望

子ども、若者たちの声を聞き、知識や情報をアップデートしながら活動を継続しつつ、自分なりのやり方で後進育成を行いたいです。3年前から実践している性犯罪の加害した人を対象とした包括的性教育も継続し多くの方々と共有したいと思います。

功労者表彰　受賞者の声

受賞者　**藤野 宣之**

主要経歴　**小児科医　相模原市医師会理事 藤野こどもクリニック院長**

［主要経歴までの略歴］

1981年北里大学医学部卒業
北里大学病院・市内病院にて勤務

2003年藤野こどもクリニック開設

2013年相模原市医師会公衆衛生委員会委員長

2021年相模原市医師会児童生徒心疾患管理委員会委員長

2023年相模原市医師会理事

取組を始めようと思ったきっかけは何ですか？

大学病院・急性期病院勤務、小児科クリニックを開業し、乳幼児から青年期の子どもたちとその家族を見守ってきた中で、地域が取り組む母子保健事業や子育て支援の活動を通じ、子どもたちが健やかに成長できる環境を整えることの重要性を感じたため。

取組をどのように展開しましたか？

相模原市が掲げる”子育てするなら相模原”の取り組みに共感し、子どもが健やかに生まれ育つ社会の実現のために、各種母子保健事業に参画するとともに、これまで不治の病と言われていた疾病を早期発見する医療プログラムを相模原市に提案する活動等を行ってきた。

今後の展望

今後は、拡大新生児マススクリーニング検査の公費助成と視覚（屈折）検査、聴覚スクリーニング検査の全例実施実現のために活動するとともに、引き続き乳幼児健診と予防接種拡充等の重要性を訴え、母子保健事業の充実と小児医療の発展のため切れ目のない支援を行っていきたい。

功労者表彰　受賞者の声

受賞者　**佐藤 良枝**

主要経歴　**病院から地域の母子保健の充実へ**

［主要経歴までの略歴］

1994年～2021年3月　神奈川県立足柄上病院に就職。2014年からは病棟科長として管理及びスタッフ教育にも携わる。

2014年～2020年　神奈川県看護協会 助産師職能理事

2021年4月　秦野市におけるおめでた教室・産後ケア・新生児訪問等母子保健事業に携わり、現在に至る。

取組を始めようと思ったきっかけは何ですか？

看護学生時代より、母子関係に興味があり、助産師を目指す。産科医師や小児科医師減少・不在など変化していく中、地域の産科医療を守りたい、自分に出来ることは何かと研鑽を積み、努力してきた。やはり、病院だけでは限界があり、地域でも自分の力を試したいと思い、現在に至る。

取組をどのように展開しましたか？

2006年、産科医師の集約化に伴い、産科医療を継続するため助産師外来や院内助産に取り組む。2017年より、小田原市立病院と協力して医師不在の院内助産を開始（コロナウイルス蔓延に伴い、2020年中止）。その間、地域の保健師と情報共有しながら妊産婦のニーズ把握に努め、産後ケアも開始。助産師職能理事としては母子保健の現状と産後ケア事業の拡大について県に要望書の提出、アドバンス助産師の普及や県内助産師の知識向上に努める

今後の展望

病院勤務で得た多くの学びを秦野市のおめでた教室・新生児訪問・産後ケア・乳幼児健診などにおいて、活用していきたいと思う。そして、地域の母子保健の充実の一助になれるよう研鑽を積んでいきたいと思う。

功労者表彰　受賞者の声

受賞者　**打出 喜義**

主要経歴　**金城大学医療健康学部教員・医師**

［主要経歴までの略歴］

1978年金沢大学医学部医学科卒業

1993年学位取得

金沢大学附属病院に勤務した28年間は周産期医療に従事した。

2014年浅ノ川総合病院産婦人科部長・産科センター長

2016年小松短期大学特任教授

2018年小松大学特任教授を経て2019年から金城大学教授

取組を始めようと思ったきっかけは何ですか？

産婦人科医を目指したのは、妊娠・分娩・産褥の現場に係わることにより、親子の健やかな育みのお手伝いをしたかったから。教員になってからは、現場での経験を活かし医療を担うことになる学生へ医療者としての心構えを育みたいと思っている。

取組をどのように展開しましたか？

患者の安全・安心を念頭に日常診療に従事した。医療現場では予期せぬ出来事が起こる。トラブルの場合に受けた相談には、公正中立を旨とした回答を心がけている。教育の現場では、善き医療者としてどうあるべきかを学生に問いかけるようにしている。

今後の展望

医療現場の改善は進んできているとは思われるが、まだまだその余地はある。医療現場に必須となってきているチーム医療の理念を医療系学生の心に芽生えさせることにより、医療を必要とする方々全てが健やかに人生を全うできることになるよう、微力ながらも励みたい。

功労者表彰　受賞者の声

受賞者　小林 由枝

主要経歴　野ノ花助産院

[主要経歴までの略歴]
1996年出張専門助産院(SANBAオフィスこまつ)開業
2007年野ノ花助産院開設
2020年長野県助産師会助産所部会長
2022年長野県助産師会上伊那支部支部長

取組を始めようと思ったきっかけは何ですか?

自然なお産に立ち会う中で、女性主体の満足できるお産の体験が、全ての事に感謝の気持ちが湧き上がり、子育てやその後の人生において自信を持って進んでいくように変化する女性の姿に、お産の持つ力を感じた。少しでも、出産がプラスの体験となるお手伝いをしたいと思いました。

取組をどのように展開しましたか?

助産院を開設して、妊婦健診・出産介助・産後のケア・母乳育児支援を通して、お母さんに寄り添い、トータルに女性を支える活動を行っています。助産院以外で出産するお母さんに対しても、カウンセリングや相談・産後ケア事業・母乳育児相談・ベビーマッサージ等の支援を行なっています。

今後の展望

妊娠が難しかったり、少子化で出産その物が減少しています。またお産が怖いという話を聞くこともあります。さらに、お産や子育てにおいて疲れきっている人も多く見られます。お母さんの不安や疲労が軽減され、女性として本来持っている力が発揮されるように、支援・援助を展開していきたい。

功労者表彰　受賞者の声

受賞者　見須 直子

主要経歴　歯科衛生士

[主要経歴までの略歴]
平成14年から現在まで南伊豆町の保健事業に従事。現在は歯科医院にも勤務しながら、双方の環境を活かした活動を展開している。

取組を始めようと思ったきっかけは何ですか?

歯科医院に通院されている方のみではなく、地域住民の方に幅広く関わることができる仕事と知り、予防・早期発見の重要性を多くの方に伝えることができると考え従事することとした。

取組をどのように展開しましたか?

妊娠期から乳幼児、学童期まで幅広い対象に健診や健康教育、保健指導を通じて関わることにより、切れ目のない歯の健康づくりに関する普及啓発に取り組んでいる。

今後の展望

妊娠期から子育て世代の保護者に関わることにより、子どもの歯の健康づくりのみならず、働き世代の方の健康増進についても積極的に推進していきたい。

功労者表彰　受賞者の声

受賞者　**花田 直樹**

主要経歴　小児科医師

［主要経歴までの略歴］

2000年4月～ 2004年3月　愛知県学校医部会幹事

2000年4月～ 2004年3月　愛知県学校保健会理事

2005年5月～現在　愛知県小児科医会理事

2014年6月～ 2018年6月　岡崎市学校保健会会長

2020年6月～現在　岡崎小児科医会会長

取組を始めようと思ったきっかけは何ですか？

開業当初（平成初期）全国的なインフルエンザの流行に伴い、急性脳症をきたす小児が急増しました。そのため多くの医療機関が救急搬送を受けいれられない事態となり、命を落とす小児例が報道されました。小児科勤務医の疲弊も問題となり一次小児救急医療の充実が急務と考えました。

取組をどのように展開しましたか？

平成16年、岡崎市では夜間小児救急医療の充実が急務と考え、岡崎市医師会内に岡崎小児科医会の医師と愛知県内3大学小児科の協力を得て毎日準夜帯をカバーする一次救急医療体制を立ち上げました。

今後の展望

今年で20年目となり課題が出てきています。各大学からの若手医師の協力で維持できてはいますが、大学の医師の働き方改革の影響と地域開業小児科医の高齢化で今後の体制維持を検討する必要が出てきています。

功労者表彰　受賞者の声

受賞者　**羽根 靖之**

主要経歴　医療法人童心会理事長
（小児科医師）

［主要経歴までの略歴］

1980年医師免許取得。1993年開業後、地区医師会長などの要職を歴任。1998年開設した病児保育室では約7500人の病児を預かってきた。2003年からファミリーサポーター養成講座の講師として約700人のサポーターを養成してきた。

取組を始めようと思ったきっかけは何ですか？

小児科医として、子供の病気の診療だけでなく、保育、保健、子育て支援にも力を入れたいと考え、少子高齢化の進む時代を見据えたニーズにあった究極の子育て支援を目指して、関連した病児保育やファミリーサポート事業に取り組もうと思った。

取組をどのように展開しましたか？

病児保育は全国の協議会に所属して、病児保育の質のレベルアップを考え、現在は学会誌の編集委員長を務めている。ファミリーサポーター養成講座の講師は、伊勢市、鳥羽市、志摩市の三市で年2回程度講義をしてサポーターを養成している。

今後の展望

病児保育では、医療的ケア児など預かる対象の拡大と対応できる環境づくりをして行きたい。ファミリーサポートに関しては、もっと利用しやすい料金設定などを行政に働きかけて、サポーターは子育てママさんたちの良き相談者になれるようなシステム作りをしていきたい。

功労者表彰　受賞者の声

受賞者　岡本 美佐江

主要経歴　助産師として性教育を実施

[主要経歴までの略歴]

2005年 ～総合周産期母子医療センター(MFICU/NICU)に勤務しながら、性教育を開始

2016年～教育機関･滋賀県看護協会勤務

2021年～滋賀県助産師会 副会長 性教育継続中

取組を始めようと思ったきっかけは何ですか?

産婦人科勤務時、思春期の若者の予期せぬ妊娠による人工妊娠中絶、性感染症増加を知り、医療者と教育者の連携した教育の必要性を感じていた。「生命誕生、いのちの大切さ、性の健康について」伝えたいと考えていた時、学校から依頼があり、いのちの教育を引き受けた。

取組をどのように展開しましたか?

病院勤務時に2名で始めた講座が、依頼の増加に伴い13名で実施することとなった。内容は担当教諭･養護教諭と共に作成し、親の手紙、赤ちゃん抱っこ、感染経路を考える実験など体験型教育を重視した。退職後は病院の助産師と退職した助産師2名で分担して継続している。

今後の展望

19年間で15校350講座実施。今後も体験型教育を中心に、生命誕生の感動･いのちの大切を伝え、自分らしく健康で幸に生きることを考えられる子どもを育成する事を目的に継続すると共に、新たに幼児対象の内容も考案したい。また、性の健康教育を現場で働く助産師へ繋げたい。

功労者表彰　受賞者の声

受賞者　郷原 寛子

主要経歴　助産師

[主要経歴までの略歴]

2002年から助産師教育に携わる。2004年から「神戸市専門職による思春期デリバリー授業(中学生)」が開始され、当初から19年間講師として関わっている。2008年「子育ち･親育ち応援事業」を立ち上げ地域と協働で子育て支援を開始した。2020年出張開業届を出し、産後ケア、養育支援にあたっている。

取組を始めようと思ったきっかけは何ですか?

2000年代、10代の望まない妊娠や性感染症、児童虐待が社会問題となり早急な対応が必要であった。2002年に助産師教育を開始し、将来「性やいのちの教育」「子育て支援」ができる助産師育成を目指して早期から性教育実習や子育て支援実習を計画した。

取組をどのように展開しましたか?

性教育バッシングやはどめ規定があり実習場所を確保するのが難しかったが、高校生と小学生に「性といのちの教育」を開始した。「子育ち･親育ち応援事業」では地域商店街と協働でセミナーやひろばを企画し、妊婦や子育て中の親子への学習機会の提供と仲間づくりを支援すると共に地域母子保健実習の場とした。現在は、産後ケア、養育支援(可能な限り妊娠期から)を行っている。

今後の展望

「性といのち」の教育では、家庭、学校、社会が連携しながら発達段階に応じた包括的性教育を継続していきたい。また、産後ケアや養育支援では、その人らしいお産･子育てができるように細切れではなく妊娠期から地域助産師が支援できる働き方を考えていきたい。

功労者表彰　受賞者の声

受賞者　沼田 朋子

主要経歴　町保健師として、
長年母子保健事業に従事

［主要経歴までの略歴］
1983年4月保健師として旧香住町に就職。健康部門、福祉部門に所属し、妊産婦から乳幼児、思春期の保健事業、障害児支援等幅広く母子保健事業に携わる。2013年以後は管理職として、子育て世代包括支援センターの開設や産後ケア事業の推進等に取り組んだ。

取組を始めようと思ったきっかけは何ですか？

母子保健は生涯の健康に通じる重要な施策であるという認識のもと、妊娠期から訪問等により支援を開始し、身近に相談のできる町の保健師としての活動を始めました。時代と共に母子保健を取り巻く環境や課題は大きく変化し、様々な健康課題に関係者等と連携し取り組んでいる。

取組をどのように展開しましたか？

妊産婦や新生児、乳幼児の全数把握を実現し、個別性を重視したきめ細やかな支援を展開してきた。行政に助産師や管理栄養士、歯科衛生士を配置し、複雑多様化する課題にも専門的に対応する体制を整備した。長年、愛育班や食生活改善推進員等と地域の健康づくりに取り組んでいる。

今後の展望

この度の受賞は、母子保健事業を丁寧に推進してきた本町の取組が評価されたものと大変うれしく、関係者の皆様に深く感謝します。今後も予防の視点を重視し、ポピュレーションとハイリスクアプローチの両面から、人と人のつながりを大切に地域に根差した活動を展開していきたい。

功労者表彰　受賞者の声

受賞者　杉野 禮俊

主要経歴　小児科医

［主要経歴までの略歴］
昭和48年和歌山県立医科大学卒業、小児科学教室入局、大学病院での研修とともに、紀南総合病院、紀北分院、済生会有田病院、海南市民病院、那智勝浦町立温泉病院などに勤務。昭和63年杉野小児科医院を開院しました。現在、和歌山県立医科大学小児科学教室博士研究員です。

取組を始めようと思ったきっかけは何ですか？

自研修医時代にEBウイルスやインターフェロンで誘導される2'-5'オリゴアデニル酸合成酵素、大学病院入院児への水痘ワクチン緊急接種などの研究をしました。開院し小学校医・保育園医を務めるなかで、予防接種などを含む子育ての大切さを学びました。

取組をどのように展開しましたか？

安佐医師会で、感染症対策、乳幼児保健・予防接種、学校保健などの委員会に所属し、子育て環境の整備を目指し、成育基本法（小児保健法）の制定も目標としました。2008年日本子ども虐待防止学会ひろしま大会では事務局長を務め、子どもの安全を守る多くの団体と連携しました。

今後の展望

子ども達は私たちの未来です。こども家庭庁が発足し、一歩前進ですが問題が解決されたわけではなく、妊娠・子育て・教育などに多くの不安や経済的負担や問題があります。子ども中心で、子ども達が遊ぶ大きな声が聞こえる明るい日本を期待します。

功労者表彰　受賞者の声

受賞者　**岡畠　進**

主要経歴　元小児科専門医
日本循環器学会専門医

[主要経歴までの略歴]

昭和47年　山口大学医学部医学科卒業

昭和47年　広島大学小児科入局

昭和55年　島根医科大学講師

昭和61年　国立循環器病センター
乳幼児特殊治療科医長

平成8年　おかはた小児科循環器科クリニック開業

取組を始めようと思ったきっかけは何ですか?

心臓に異常がある子どもたちは、生まれてすぐに重い心疾患を呈することがあります。子どもの心臓病、主に先天性心疾患を中心に、川崎病による冠動脈障害等により苦しんでおられる小児に対し、力になるため、小児科専門医を志しました。

取組をどのように展開しましたか?

小児科専門医として、広島市の心臓病検診の精度向上及び検診体制の構築に務め、また、若年者心疾患対策協議会、広島市医師会学校医委員会、広島県医師会学校医部会心臓検診検討会等の多数の活動を通して、学校保健の向上や小児救急医療体制の構築維持・発展に務めております。

今後の展望

自院での診療業務に留まらず、継続して広島市の各種予防接種・健診事業、土・日・祝日及び盆前後並びに年末年始の救急医療、園医・学校医を務めることにより、今まで以上に、乳幼児の異常の早期発見、疾病予防及び健康増進に貢献していきたいと考えております。

功労者表彰　受賞者の声

受賞者　**百衣 万里子**

主要経歴　山口県母子保健推進協議会 会長
子育て支援拠点
「ほのぼのキッズスマイル」代表

[主要経歴までの略歴]

2000年4月～現在
宇部市母子保健推進員

2009年4月～2015年3月
宇部市母子保健推進
協議会　会長

2013年4月～2019年3月
宇部市子ども・子育て
審議会　会長

2019年4月～現在
山口県母子保健対策
協議会委員

取組を始めようと思ったきっかけは何ですか?

長女が生まれた時期に母子保健推進員の方に声をかけていただき、「地域のお子さんと一緒に活動したい」という思いで活動を始めました。活動している地域は県外からの転勤族の方が多いため、まずは私たちを知ってもらい、いつでも気軽に来れる場にできたらという気持ちでした。

取組をどのように展開しましたか?

母親同士の橋渡し役として多くの親御さんとお話できるよう工夫し、赤ちゃん訪問では身近な遊び場や相談先としてサークルを知ってもらえるよう積極的にお誘いしています。また、季節の催し(七夕・運動会・クリスマスなど)を楽しんでもらえるよう、工作などにも力を入れています。

今後の展望

子育て中の保護者の方は、理想の子育てを思い描きながらも、様々な悩みを抱えていると感じています。そういった保護者の方がサークルや訪問の場で話をすることで少しでも気持ちが楽になり、私たちを身近に感じてもらうことで、地域とつながりが持てるようになればと思っています。

功労者表彰　受賞者の声

受賞者　**原田 恵美**

主要経歴　**助産師**

［主要経歴までの略歴］

1985年～2018年　助産師として総合病院に勤務の傍らで、2000年～性教育を中学校高校で行う。

2018年　はらだ助産院（出張専門）開院

2020年　八幡浜市と産後ケア事業を委託

2022年～現在　愛媛助産師会会長

取組を始めようと思ったきっかけは何ですか？

私が居住している地区は、少子高齢化が著しい分娩施設がない地域です。子供を産むには恵まれない環境の中でこそ継続的な母子支援を行う必要性を感じ地域でも質の高いケアを提供したいと思った。また小さな町の利点を生かせる顔の見える環境を大切にしたいと思った。

取組をどのように展開しましたか？

分娩施設、開業助産師のいない地区で助産院を開業し出張専門で母乳相談及び育児相談事業を開始。市と産後ケア事業を委託　また両親学級事業の講師として参加し妊娠中から産後の支援を行ってきた。同時に2000年から行ってきた性教育事業を継続し、助産師として命の大切さを伝えてきた。

今後の展望

産後ケア事業を継続し、育児不安、孤立する育児、産後うつの早期予防に努め更なるケアの向上のために自己研鑽に努める。教育、行政、医療現場がともに一体になり切れ目ない母子支援及びプレコンセプションケアを実施していくことにより地域から健康な環境づくりを行っていきたい。

功労者表彰　受賞者の声

受賞者　**横地 一興**

主要経歴　**医療法人 よこち小児科医院 開設**

［主要経歴までの略歴］

1973年3月　久留米大学医学部卒業

1973年4月　久留米大学医学部小児科学教室入局

1986年4月　久留米大学医学部小児科学教室講師

1986年8月　よこち医院勤務

1989年7月　医療法人 よこち小児科医院 開設

取組を始めようと思ったきっかけは何ですか？

将来を担う子供たちが健やかに育っていくには、子供たちを取り巻く環境の更なる整備が必要と考えました。柳川地域における小児科専門医の数は当時少なく、かかりつけ医として地域社会に携わることにより、子供達の成長の手助けになればと思い活動を開始しました。

取組をどのように展開しましたか？

乳児健診に積極的に出務し、疾患の早期発見に努めながら子供の健やかな発育に関する助言を行ってきました。また、子育て中の家族や子供をサポートするための「エーコステーションはぐくむ」を医院隣に設立。食育・遊育の視点で子育ち、親育ち支援プログラムを実施しています。

今後の展望

「エーコステーションはぐくむ」の取り組みをインターネットを通じて広く発信し、広く多くの方々に支援プログラムを体験してもらえるように努めていきます。また、子育て支援の一環として屋外での自由な遊びの場としての”プレイパーク”を地域で広めていきたいと思います。

功労者表彰　受賞者の声

受賞者　佐藤 美由紀

主要経歴　和水町役場健康福祉課長補佐
現在和水町子ども家庭センター
保健師

[主要経歴までの略歴]

1990年保健師として和水町に入庁。主に母子保健事業を担当し、思春期相談員資格、NP及びBPファシリテーター資格を取得。全ての子どもの健康の保持増進のため学童の血液検査を町独自で実施。更に子育て支援では自主グループ育成、NP及びBP講座を開催している。

取組を始めようと思ったきっかけは何ですか?

体育等で貧血症状をする者が見受けられ小中学生に貧血検査を実施したが、肥満傾向児の増加、生活習慣病の低年齢化が懸念され脂質、糖、血圧等の検査を追加した。検査結果から子ども,保護者の健康意識を高めることの重要性を感じ養護教諭と連携し健康教育及び個別指導を開催。

取組をどのように展開しましたか?

事前に学校教育課に検査の必要性を説明し予算獲得を依頼。子どもが自分の健康状態を知る上で血液検査は有効であることを保護者へ説明する。血液検査の項目及び判定は校医に依頼し、検査実施機関と実施方法を調整し、事後指導は校医、養教、保健師、栄養士と十分話し合い実施。

今後の展望

栄えある受賞を賜り、共に活動に取り組んだ皆様のおかげと深く感謝しております。学童血液検査については後輩の保健師、栄養士が継続して保健指導を実施しています。今後は次世代を担う子どもたちが健やかに育つために母親の子育て相談、支援、仲間作りに丁寧に関わっていきたい。

功労者表彰　受賞者の声

受賞者　興梠 知子

主要経歴　高千穂町国民健康保険病院
小児科医師

[主要経歴までの略歴]

1981年九州大学医学部卒業。同付属病院救急部入局

1984年雪の聖母会聖マリア病院小児科入職

1985年福岡大学医学部小児科入局

1993年高千穂町国民健康保険病院小児科入職

2002年同病院副院長

2014年高千穂町保健福祉総合センター所長兼務

2022年同病院退職。会計年度任用職員として同病院小児科勤務

取組を始めようと思ったきっかけは何ですか?

医学部入学前から脳性麻痺の早期発見早期治療に関心があり、小児科医を志望した。高千穂町出身の夫と結婚し、同町の国民健康保険病院に入職するにあたり、町内唯一の小児科医として、町内の子どもたちの健康と心身の発達を支える仕事を全うしたいと考えた。

取組をどのように展開しましたか?

小児の健康と発達を支えるために医療と保健活動に積極的に取り組んだ。在宅医療にも対応した。乳幼児健診や発達相談では、特に5歳児健診を全国に先駆けて導入した。就学支援委員会や要保護児童対策地域協議会等に参加した。保育士、教師等との発達関連の勉強会も主催した。

今後の展望

出生前から乳幼児期、学童、思春期、青年期まで一貫して健康と発達を保障できる事業に、行政とも協力して関わりたい。さらに、障害のある方や高齢になって要介護状態になった方でも地域で人生を全うできる地域づくりに貢献していきたい。

功労者表彰　受賞者の声

受賞者　**屋良 朝雄**

主要経歴　小児科医

［主要経歴までの略歴］

1980年、金沢大学医学部卒業。1983年、琉球大学小児科助手。1993年、同講師。1998年那覇市立病院入職.小児科部長。1999年、NICUを開設。2005年、小児科医による24時間小児救急医療を開始。2016年～2020年、那覇市立病院理事長兼病院長。

取組を始めようと思ったきっかけは何ですか？

1980年代前半までの周産期医療における新生児救命率はきびしい状況にあった。その予後の改善を願って、40年以上にわたって周産期医療に携わってきた。また、小児救急医療に関しても中核病院小児科の使命感を感じ、少ないスタッフで24時間小児救急医療を行ってきた。

取組をどのように展開しましたか？

沖縄県周産期ネットワーク協議会の一員として、沖縄県の周産期医療体制の確立に関わってきた。また、院内においては少ない人員できびしい勤務状況ではあったが、チーム医療の重要性を認識し、各自がやりがいを感じながら周産期医療、小児救急医療を推し進めていった。

今後の展望

現在は市立病院を退職しており、積極的な関わりはなくなったが、周産期および小児医療を行っている医療機関で微力ながら診療応援を行っている。また新生児蘇生法講習会（NCPR）インストラクターや、小児急病センターの応援は続けていきたい。

功労者表彰　受賞者の声

受賞者　**徳山 千登世**

主要経歴　助産師

八重山地域において38年病院の周産期部門に勤務。安心･安全な分娩環境を目指し、助産師の人材育成と自立に向け助産師外来を開設。若年妊産婦や社会的ハイリスク妊産婦の地域連携に取り組んだ。また思春期保健の課題に取り組み、NPO法人を設立し活動を継続している。

［主要経歴までの略歴］

1983年～沖縄県立八重山病院

2006年　NPO法人Love Peer Price設立。中学･高校の思春期教室への講師派遣やピアサポーター養成講座などを実施し、思春期の子どもたちが生き生きと生活できる環境作りと、社会における支援体制づくりを行う

取組を始めようと思ったきっかけは何ですか？

当時、若年妊産婦が年間20～30名、性感染症の罹患率も高く、若年妊産婦の課題に直面。臨床での支援だけでは現状を改善できないと痛感し、中学･高校での思春期教室（出前講座）に参加し、問題意識を持つ仲間（養護教諭、教員、助産師、保健師）との勉強会参加がきっかけ。

取組をどのように展開しましたか？

学校での性教育は内容に制限があった。若年妊娠や性感染症の課題に保健所と協力し、八重山における小中高校生の性に関する意識調査を行い、地域の実態と学校における性教育の必要性をアピール。助産師が出前講座で地域の実態や避妊について具体的な知識を提供できるようになった。

今後の展望

NPO法人では石垣市の若年層自殺対策事業の委託を受け子どもを支援する大人向けの研修や子どもたちの相談場所として「ユースカフェ」を開始。地域の妊産婦や子どもたちを取り巻く環境を踏まえ課題に応じて関連機関と連携･協力し、助産師の専門性を生かした取り組みをしていく。

功労者表彰　受賞者の声

受賞者　**仙田 昌義**

主要経歴　総合病院国保旭中央病院
小児科部長

［主要経歴までの略歴］

1996年　国立琉球大学医学部卒
　　同年総合病院国保旭中央病院研修医
1998年　同　小児科医員
2007年　同　新生児科医長
2013年　同　小児科部長
現在家族支援チームFAST代表
千葉大法医学教育研究センター特任研究員
日本子ども虐待医学会理事

取組を始めようと思ったきっかけは何ですか？

小児科医になってから子ども虐待の患者さんを受け持ち、個人での対応の限界を感じ、医療機関で如何に対応すべきか考え始めたのがきっかけ。

取組をどのように展開しましたか？

個人ではなくチームで対応すべく院内虐待対策チーム（家族支援チーム：FAST）を立ち上げた。また、県全体の虐待チームである千葉県児童虐待対策研究会に参加。研修面では日本子ども虐待医学会での虐待研修プログラムへの関与。千葉大法医学とも児童虐待に関してコラボ中。

今後の展望

今後も引き続き子ども虐待対応を行うのはもちろんだが、医療機関において、子ども虐待対応を担ってくれる次世代の人材の育成を検討。また、チャイルドデスレビュー（CDR：予防のための子どもの死亡検証）を全国展開できるように千葉大法医学教室と活動中である。

功労者表彰　受賞者の声

受賞者　**鈴木 利人**

主要経歴　精神科医

［主要経歴までの略歴］

1982年　筑波大学医学専門学群卒業、同大学附属病院精神神経科入局
2008年　順天堂大学精神行動科学教授
2021年　同大越谷病院院長
2018年　日本周産期メンタルヘルス学会理事長
2020年　日本精神神経学会、日本産科婦人科学会協働周産期メンタルガイド作成委員会委員長

取組を始めようと思ったきっかけは何ですか？

以前より国内の精神医療では周産期メンタルヘルスへの関心が乏しく、多くの精神科医がこの分野で適切な対応が困難であった。一方、妊孕性を有する女性世代で向精神薬を服用する割合が高まっており、周産期メンタルヘルスの向上が重要であると考えるようになった。

取組をどのように展開しましたか？

成育医療研究センター「妊娠と薬情報センター」による全国拠点病院作りの研修会に講師として活動。周産期メンタルヘルス研究会に参加し2014年に学会化して18年に理事長を務めた。日本家族計画協会主催の講演を始め全国を講演してこの分野の啓発に努力してきた。

今後の展望

周産期メンタルヘルスに携わる精神科医、産婦人科医、助産師、薬剤師を対象に講演活動を続け、地域の周産期メンタルヘルス研究会作りにも参画する。産婦人科医会の妊産婦死亡症例検討会で自殺症例を検討し、また地域の産後うつ病女性の診察活動と通して自殺予防対策を考えていく。

功労者表彰　受賞者の声

受賞者　**齋藤 美貴**

主要経歴　**産婦人科医**

［主要経歴までの略歴］

1990年弘前大学医学部卒、津軽保健生活協同組合健生病院入職。1993年から産婦人科医。2006年BFH認定。2007年あおもり母乳の会設立。2015年から弘前市要保護児童対策地域協議会代表者会議委員、青森県立高等学校産婦人科校医、ALSO開催（CD）。

取組を始めようと思ったきっかけは何ですか？

「母と子が健やかに」をキーワードに「自然なお産と母乳育児」を大切に30年以上にわたり地域の産婦人科医として数多くの妊娠・出産に携わっている。お産の現場にいれば、若年妊婦や飛び込み分娩、貧困などの問題にぶつかり、多くの特定妊婦に関わり、性教育の大切さなどを痛感。

取組をどのように展開しましたか？

母乳育児に関しては自院がBFHの認定を受け、自院での推進にとどまらず、県内、東北、全国での活動を展開し、BFH施設連絡会議の役員も務めている。性教育活動に関しては中高校での講演を開始し、その後青森県教育委員会から産婦人科校医の委嘱を受け尽力している。

今後の展望

母乳育児推進、性教育活動の継続。現在は、青森県性暴力被害者支援実務者連絡会議にも青森県産婦人科医会女性保健委員会委員長として参加しており性被害者支援活動に尽力している。そして、周産期救急関連のインストラクターをこの間取得しており、後進育成、後進の指導も重要と考えている。

功労者表彰　受賞者の声

受賞者　**服部 律子**

主要経歴　**助産師・奈良学園大学教授**

［主要経歴までの略歴］

1989年助産師となり京都大学医学部附属病院産科分娩部で勤務。その後、京都大学医療技術短期大学部、名古屋市立大学、愛知県医師会、椙山女学園大学、奈良学園大学で看護師・助産師の養成と、周産期の母子のケアや思春期の健康支援、親準備性に関する研究や実践に従事。

取組を始めようと思ったきっかけは何ですか？

助産師になり不妊治療を受けて妊娠・出産された女性をケアさせていただく中で、当時まだ明らかにされていなかった心理的に「母親になる」ことに関心をもち、助産師としてどのように関われば良いのか、なにかできるのかと思ったことがきっかけです。

取組をどのように展開しましたか？

生育歴の中での親子関係や思春期までの発達や心理が親準備性に影響していること、親になる前の心理状態が産後のメンタルヘルスに影響することなど、親準備性研究で明らかになったことを発信するとともに、思春期の健康支援や子育て支援を連続線上で捉えて展開してきました。

今後の展望

母親だけでなく父親も含めた親の産後のメンタルヘルスへの支援やどのようにすれば親準備性を育むことができるのかについて探究していきたいです。また、これらの視点をもって母子保健に貢献できる看護職の育成に努めていきたいと思います。

功労者表彰　受賞者の声

受賞者　羽根 司人

主要経歴　日本歯科医師会
地域保健委員会 委員

［主要経歴までの略歴］

平成15年4月　社団法人三重県歯科医師会理事
平成23年4月　日本歯科医師会 地域保健委員会 委員
平成25年6月　日本歯科医師会 地域保健委員会 副委員長
平成29年6月　日本歯科医師会 地域保健委員会 委員長
令和3年6月　退任

取組を始めようと思ったきっかけは何ですか？

都市部においては、う蝕と虐待の関連は、直接関連があるが、地方では、祖父母が子育てを主に担っている家庭では、経験的にう蝕が多いと感じていたため、両者の差異について、新たに調査する取り組みの必要性を感じていた。そこで、う蝕と生活習慣に着目した取り組みを始めた。

取組をどのように展開しましたか？

令和2年日本歯科医師会地域保健委員会委員長として厚生労働省委託事業の医療従事者向け虐待初期対応研修のコンテンツの作成に参加した。令和3年日本歯科医師会地域保健担当理事として日本歯科医師会ホームページ掲載「健やかな子育て支援のチェックリスト」の作成に参加した。

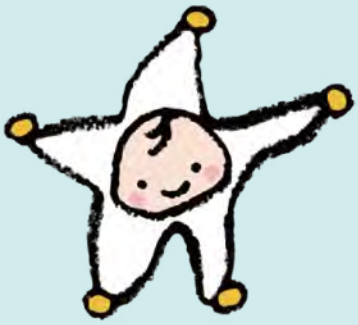
今後の展望

虐待とう蝕との関係はある程度、周知できたとは思うが相変わらず不幸な虐待事例は後を絶たない。今後、もう少しでも歯科関係者と児童福祉関係者の連携が深まることを切望している。できれば各地域での要保護児童対策協議会への歯科医師の参加が増えることも望みたい。

令和６年度

健やか親子21内閣府特命担当大臣表彰

功労者表彰［団体］



功労者表彰　受賞者の声

受賞者　豊後大野市愛育会

［主要経歴までの略歴］

平成20年（2008年）5月、
市町村合併に伴って、豊後大野市愛育会が設立。

平成21年（2009年）5月、
市の委託事業として親子交流事業の開始。

取組を始めようと思ったきっかけは何ですか？

市町村合併前の平成18年当時は、三重町と千歳町の2町にしか愛育会組織は無かった。声かけ・見守りの地道な活動で、地域作りをしてきた愛育会組織をなくさず、合併後も続けていきたいという思いで、会員・行政が力をあわせて市内全域で愛育会活動が広がるように取り組みをおこなった。

取組をどのように展開しましたか？

- 愛育会員養成講座を市とともに開催して、新規会員の養成に努めた。
- 県や市の事業を受託し、親子が集える交流の場を提供した。
- 市保健師の赤ちゃん訪問への同伴、乳児学級で母親同士の交流ができるよう託児を引き受けた。

今後の展望

年に3回作成している「豊後大野市愛育だより」を多くの方に配布し、愛育会活動を知っていただき、参加してもらう。また、愛育会が開催する交流事業を通して、親子が笑顔になれる地域づくりを目指す。

功労者表彰　受賞者の声

受賞者　北杜市母子愛育会

担当者　櫻井　直美

［主要経歴までの略歴］

2005年：市町村合併を機に、3町の愛育会から北杜市母子愛育会を設立。その後2町で新たに母子愛育班が立ち上がり、現在5町の愛育班で北杜市母子愛育会として活動。2016年山梨県母子保健功労者知事表彰。2019年恩賜財団母子愛育会会長表彰をいただいている。

取組を始めようと思ったきっかけは何ですか？

昭和8年上皇陛下誕生を記念して、昭和天皇から頂いた御下賜金をもとに、「恩賜財団母子愛育会」が設立されたことが始まりになります。合併前の旧大泉村時代、平井トクジ氏を会長として、ユニセフミルク支給協力、家族計画の学習会を重ねるなど、活発に活動を続け、今に至ります。

取組をどのように展開しましたか？

住民の声から、総合健診の託児の必要性を行政につたえ愛育会で託児を行うなど、声掛け、見守りを大事に活動を続けています。5班で特色ある活動を行い、新生児だけでなく、幼児訪問、各種イベントへの参加、交流の場づくりなど、現代のパパママの声を大事に活動を行っています。

今後の展望

高齢化、少子化もあり、活動の対象も母子から全世代に変化してきています。会員も高齢化・仕事をもっての活動になり、地域の役の成り手がいないという問題もあります。愛育のこころを、母子だけでなく、住民の皆様にも知ってもらい、地域で子育て支援できるよう活動していきます。

令和６年度

健やか親子21内閣府特命担当大臣表彰

健やか親子表彰

健やか親子表彰 —最優秀賞—

認定特定非営利活動法人キープ・ママ・スマイリング

「一食・一箱の支援」で、子どもの入院に付き添う家族に寄り添って10年
～大規模な実態調査を実施し、付き添う家族の声を国へ届ける

活動の目的

入院している子どもとその家族が笑顔で向き合える社会を目指し、付き添い家族の生活環境の改善を目的に活動しています。「子どもの早期回復には、付き添う親が健康で笑顔であることが大切」、これが活動の核となる考えです。

具体的な取組内容

付き添い者へ「もの・食・情報」による支援

●ミールdeスマイリング（食支援）事業

毎月、付き添い家族へ手作りの食事や地域の飲食店のお弁当を届ける「食支援」活動

●付き添い生活応援パック無償配布事業

コロナ禍で付き添い環境が悪化した家族への生活支援を目的に2020年10月に開始。長期間泊まり込み付き添うご家族へ支援物資を無償提供。届ける商品の多くは企業からの寄付。企業からの応援メッセージを同梱し「あなたは一人じゃないよ」の思いを込めて日々全国に発送しています。

●国への要望書提出

2023年6月1日、「付き添い生活実態調査」に基づく要望書を調査結果とともにこども家庭庁と厚生労働省に提出。同日、記者会見を実施したところ、新聞、テレビなど200回以上の報道数となりました。

私たちが目指す世界

私たちが大切にしているのは、「病気の子どもやきょうだいが、いつでも親と一緒に過ごせる入院環境を保障されていること」です。それは子どもの大切な権利であり、親が付き添うことが回復や成長・発達に重要だと考えるからです。“付き添う／付き添わない”が選べることを前提に、親が健康を損なわず、経済的な負担も少なく安心して付き添え、付き添えない場合は安心して医療者に任せられ、親子がいつでも触れ合える世界を目指しています。

健やか親子21表彰　最優秀賞

受賞者の声　担当者：白木 美和子

●取組を始めた経緯は何ですか？

理事長の光原は先天性疾患のある長女・次女を出産し、長期にわたり6つの病院で付き添い入院を経験しました。過酷な付き添い環境の中、自身が体調を崩し倒れ、周囲にも同様に心身を病む親がいることを知り、次女の急逝後に団体を設立。付き添い家族への直接支援活動を始めました。

●具体的にどのように取組の普及を工夫しましたか？

アンケートを通じて付き添う家族の困りごとを丁寧に掬い上げた上で支援活動を設計し、また、支援内容の満足度が高まるよう柔軟に対応しています。また、付き添い入院という社会課題の認知拡大を目的とした啓発イベントも毎年実施し、メディアへの広報にも力を入れてきました。

●取り組む中で苦労したこと、大変だったことは？

院内で付き添う家族への支援は、支援の広報やベッドサイドまでの物資お届けに病棟スタッフのご協力が欠かせません。ただ、郵送物受け取り禁止等の理由で支援をお届けできない事例も少数ながら存在します。医療現場の皆さまに支援活動を受け入れていただく関係性の構築が大切です。

●取り組む中で苦労したこと、大変だったことに対して、どのように乗り越えたか

支援内容と配布実績、受け取ったご家族の喜びの声など「付き添うご家族の現状と支援の必要性・効果」を丁寧にご説明すると同時に、医療機関側の困りごとや支援受け入れに対する課題を伺い、付き添い家族への支援をどのような形で届けられるのかについて個別に対話を重ねます。

●今後の展望・課題は？

当事者の声を国はしっかり受け止め、付き添い環境改善に向けて国が動き、病院にバトンが渡されました。現状が本当によりよく変わったと実感できるまで、これからも付き添う家族に寄り添い声を聞き、小児医療関係者と連携しながらNPOとして出来る支援活動に尽力してまいります。

評価委員からのコメント

病気の子供に付き添うのは親として当然、多少付き添いの環境が悪くても我慢しなければならない。病児の付き添いのために小児病棟で過ごさなければならない親御さんたちはそんなふうに考えていたと思います。でも頭ではわかっていても、小児病棟の付き添いは非常にストレスのかかること。ただでさえお子さんの病気について心配なのに…。これまで公になってこなかった社会課題に10年前から取り組み、支援を行ってこられたことについて敬意を表します。またさらに地域や他の支援団体との連携、企業の参加など、どんどん活動の輪を広げ、そうした活動の成果をこども家庭庁・厚生労働省が受け止め、診療報酬改定に繋げられたことは素晴らしいですね。病気の子供達も家族と一緒に過ごす権利がある、この当たり前のことがより良い環境のもと実践していけるように、今後も期待しています。この度は受賞おめでとうございます。

健やか親子21推進本部副会長／日本医科大学付属病院 女性診療科・産科　**川端　伊久乃**

健やか親子表彰 ―自治体部門　優秀賞―

神奈川県横須賀市地域健康課

妊娠前から乳幼児期までの切れ目ない支援

活動の目的

全国的に少子高齢化が進んでいますが、本市の合計特殊出生率は、全国や神奈川県よりも低く、出生数も年間約100 人の減少が見られました。
これまで、妊娠、出産、子育て期の切れ目ない支援に取り組んできましたが、少子化対策の一環として、妊娠後からではなく、妊娠前からの支援の必要性を感じ、以下の支援を加え、お子さんを望まれる方から子育て期までの一貫した母子保健施策の充実を図ってきました。

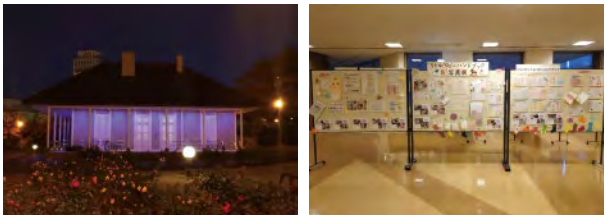
具体的な取組内容

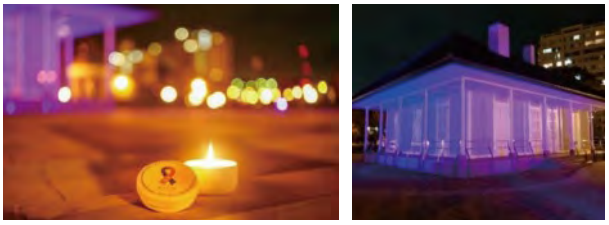
1. 県内初の妊活支援としてパンフレットを作成
2. 高額な医療費がかかる不妊治療や不育症治療費の市独自助成
3. 県内初の妊活 LINE サポート事業を実施
4. 女性健康支援セミナーの実施
5. 不妊症講演会・相談会・交流会の開催
6. 産後うつの早期発見・早期支援のための取組み
7. 行政と医療機関等の多職種連携を目的とした「周産期メンタルヘルスを考える会」の開催
8. 低出生体重児の支援
9. グリーフケアの実施、ベイビーロスアウェアネスウィークの取組み

▲妊活 LINE サポート事業チラシ

▲女性健康支援セミナーチラシ

▲妊活支援パンフレット


▲低出生体重児支援として早産児家族によし添える社会づくりを目指して実施したライトアップ・写真展の様子


▲グリーフケアとしてベイビーロスアウェアネスウィークの取組みで実施したキャンドルイベント

健やか親子21表彰　優秀賞

受賞者の声　担当者：小林 幸恵

●取組を始めた経緯は何ですか？

これまで、妊娠、出産、子育て期の切れ目ない支援に取り組んできましたが、少子高齢化が進み、少子化対策の一環として、妊娠後からではなく、妊娠前からの支援の必要性を感じ、お子さんを望まれる方から子育て期までの一貫した母子保健施策の充実に取り組みました。

●具体的にどのように取組の普及を工夫しましたか？

妊娠前の相談は、専門性が高く、相談のしにくさを想定し、行政に加え、民間の相談ツールの選択肢を増やし、相談しやすい環境を整えた。不妊に悩む方の経済的負担の軽減、グリーフケア、低出生体重児への支援など、当事者の想いに心を寄せて、支援内容を検討した。

●取り組む中で苦労したこと、大変だったことは？

不妊治療の助成では、市独自の制度として、市民が納得できる仕組みを構築すること。低出生体重児、流産・死産された方、不妊に悩む方への支援では、行政の立場からの想いの届け方。周産期メンタルヘルスを考える会では、医療機関や関係機関との連携の在り方について調整を要した。

●取り組む中で苦労したこと、大変だったことに対して、どのように乗り越えたか

職員の創意工夫で協力しながら前向きに取り組んだ。ベイビー ロス アウェアネス ウィークでは、他課の職員のアイデアも巻き込み協力を得られた。周産期メンタルヘルスを考える会では、これまでの信頼関係を軸に、趣旨に賛同してくれる先生の協力を得ることができた。

●今後の展望・課題は？

妊娠・出産・子育ては、出生数が減少することで様々な影響があると想定するが、妊娠・出産・子育てを望む方の思いに寄り添い、子どもの健やかな育ちを支えていくための支援の充実を図っていきたい。今後も「ひとりではない」ことを知ってもらえるような発信をしていきたい。

評価委員からのコメント

妊活支援や不妊治療費等の市独自助成など妊娠前からの支援は先駆的であり、職員の皆様の創意工夫による取組であることは特筆すべき点だと感じました。プレコンセプションケアの推進に向けた庁内連携のための会議開催や、市民への普及啓発にも力を入れているとのこと、今後の発展を期待しております。

国立保健医療科学院 疫学・統計研究部　部長　**上原 里程**

妊娠後から子育て期のみならず、妊娠前からの支援、更にはグリーフケアまでをも含む幅広い取組が素晴らしいです。タブーとされてきた部分を可視化し、話題に挙げることができるようになる様々な取組は、多くの人の心に寄り添う社会の醸成の一助となっているのではないでしょうか。ご受賞、おめでとうございます。

埼玉医科大学 助教　**高橋 幸子**

行政として、結婚を機に夫婦で考えるための健康・妊娠・出産・子育ての情報を一元化し、冊子やHP等で知識の普及啓発や関連政策の充実を図ってきたこと、神奈川県初となる「妊活LINEサポート事業」を実施し、気軽に相談できる環境や情報提供が当事者の満足度につながっている点等が評価されました。

NPO法人 子育てひろば全国連絡協議会理事長　**奥山 千鶴子**

プレコンセプションケアや周産期メンタルヘルス等の母子保健の重要課題に取り組むとともに、グリーフケア等支援の届きにくい問題にも目を向け、多様なアプローチで親子の切れ目ない支援を展開しています。2016年からの活動を通じて支援体制が構築されており、他の自治体の模範となる素晴らしい取組です。

帝京大学医学部小児科　主任教授　**三牧 正和**

健やか親子表彰 ―団体部門　優秀賞―

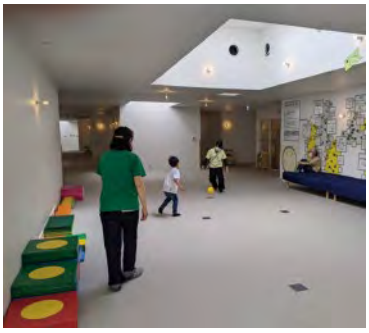
公益財団法人　チャイルド・ケモ・サポート基金

小児がんや重い病気をもつ子どもと家族のための滞在施設の運営と相談支援の実施

活動の目的

2005年、こどもが小児がんで付き添い生活をした親と医療者が中心となり、患児と家族の入院治療中のQOLを考える研究会を発足。研究会の中で親にアンケートを実施したところ、「治療中でも家族が一緒にいたかった。」「きょうだいに会わせたかった」「ゴロゴロくつろげる場所が欲しかった。」「子どもが大好きなママのかぼちゃスープを作ってあげたかった。」というような声が集まりました。そのため、「子どもが治療中でも家族が一緒に過ごせる日本で初めての施設」を建設するべく2006年よりNPO法人として活動を開始しました。2010年財団法人を設立し、神戸に「チャイルド・ケモ・ハウス」の建設を決定。多数の方々からのご寄付により、2013年2月に完成しました。当初はチャイルド・ケモ・クリニックを併設していましたが、入院よりも付き添い家族の滞在のニーズが圧倒的に多かったため、2021年4月よりクリニックを休止し重い病気の子どもと家族のための滞在施設として運営しています。施設を設計時に、建築家の方に付き添い家族の想いを伝えたところ、「親が笑顔でなければ子どもは笑顔になれない。」と言ってくださり、チャイルド・ケモ・ハウスの各お部屋にはくつろいで眠れるベッド、ゆっくり湯舟につかることのできるお風呂、こどもにご飯を作ってあげられるキッチン、明るい陽射しが差し込む天窓などが創られました。

具体的な取組内容



当施設では小児の入院付き添いをする滞在者を365日24時間体制で受けれており、滞在の支援、相談支援、自立支援事業、チャリティー・啓発活動、施設管理等を行っています。
滞在希望については、疾患別では9割が悪性腫瘍、それ以外では先天性心疾患等のお子さんのご家族が多いが長期入院をされる方であれば疾患名による入居制限はしていません。
長期入院生活においては家族がバラバラの生活を余儀なくされるため、できる限り家族が一緒に家のように生活できるような環境を提供しています。土日や夏休みなどはきょうだいが当施設に来て家族一緒に過ごしたり、就園前のきょうだいであれば、毎日当施設で生活しているお子さんもいます。当施設は長期入院付き添いをされるご家族の休息の場であり、生活の場となっています。
ファミリーサポート事業として、滞在者への相談支援をはじめあそびや預かりなどのサポートを行っています。相談支援では、日中や夜間に病院から帰ってきたときに不安なこと等をスタッフが傾聴しています。中には地元の行政の窓口につないだり、学校とのやりとりをサポートしたりという地域に帰っていくための支援も行っています。患児やきょうだいと遊んだり、スタッフと話をすることで必要な支援を検討したりもしています。
ハウス内イベントでは、食事提供やプロのバリスタによりほっとカフェやプロのカメラマンにより写真撮影など滞在ご家族に癒しの時間を届けています。
小児慢性特定疾病児童等の自立支援事業の一環で行っている居場所づくり「よりみち」を週に2回実施し、当施設の一部を開放してふらっと立ち寄って遊んだり勉強できる空間にしています。当施設に滞在していなくても、近隣病院に入院されている方や地域で重い病気をもちながら生活されている方などを対象としています。
退居後、地域に帰っていくお子さんやご家族が孤立することなく安心して生活できるようにという想いで地域の中に病気をもつ子どもと家族の理解者を増やす「あのねサポーター養成講座」を実施しています。
チャイルド・ケモ・ハウスチャリティーウォークは今までに10回実施し、延べ8794名の参加者となりました。重い病気のこどもと家族を支援したいと思ってくださる方や同じような経験をされた当事者たちが「自分もだれかのために」と一歩を踏み出すきっかけとなるイベントとなっています。
利用者の口コミが広がり、19室の居室はほぼ満室の状態が続いています。

健やか親子21表彰　優秀賞

受賞者の声　担当者：田村 亜紀子

●取組を始めた経緯は何ですか？

2005年、子どもが小児がんで付き添い生活をした親と医療者が中心となり患児と家族の入院中のQOLを考える研究会を発足。治療中でもあたりまえの生活ができる施設の必要性を感じ2006年NPO法人として寄付集めを開始。2013年神戸にチャイルド・ケモ・ハウスを開設。

●具体的にどのように取組の普及を工夫しましたか？

施設建設の支援を呼びかけるためには、広く一般の人に重い病気をもつ子どもと家族の現状を知っていただく必要があった。長期の入院生活や付き添い家族の現状についてメディアの協力を得て広く発信するとともに、一般の子ども達も楽しく参加できるイベント等を実施した。

●取り組む中で苦労したこと、大変だったことは？

開設当初は患児が当施設で治療を受けながら家族で過ごすことを目指していたが利用者が増えず、19室ある部屋の多くが空室の状態が続いた。当時、終末期を家族で過ごしたいという大切なニーズに応えてはいたが、空いているお部屋の有効活用ができていない状況であった。

●取り組む中で苦労したこと、大変だったことに対して、どのように乗り越えたか

開設から2年後に病院での付き添い生活が大変なので当施設を利用したいというニーズがあり、初めて家族のみの滞在を受け入れた。「ここなら子どもも連れて来れる」と患児も治療の合間に利用されるようになり、その後、口コミで滞在者が増え続け現在は満室状態になっている。

●今後の展望・課題は？

当施設は日常生活に近い環境を提供するとともにスタッフが日々、滞在中や退居後も相談支援を行ってきた。今後も当事者目線で病気の告知直後や治療中、終末期、成長過程での困難等の相談ができ心のよりどころとなる施設となることを目指している。

評価委員からのコメント

ご受賞おめでとうございます。入院治療中も家族が一緒に過ごせる環境づくり等を担っている本取組は、入院されているお子様と保護者だけでなく、兄弟姉妹を含めた「家族」が笑顔になれる素晴らしい取組です。今後も引き続き、入院されているお子様とご家族にあたたかい居場所を提供していただくことを期待いたします。

全国養護教諭連絡協議会　常務理事　**大森 和枝**

小児の入院付き添いは長期にわたることも多く、ご家族の身体的・精神的な負担が余儀なくされます。365日・24時間体制で滞在者の受け入れを行う体制を整えることは容易ではないと思いますが、継続的に支援し続け、患児とご家族の方々が一緒に笑顔で過ごせるような場を提供している素晴らしい取り組みです。

成城木下病院 師長　**落合 直美**

この度のご受賞、誠におめでとうございます。当取組は、重い病気を持つこどもとその家族を支えるすばらしい活動です。こどもの長期入院中にきょうだいも含めた家族全員が一緒に過ごせる環境を提供し、家族の絆を深め、精神的負担を軽減しています。また、自治体との連携で支援の継続性を担保されている点も、他の取組の模範となります。

KODOMOLOGY株式会社　価値開発本部長　**岡田 優子**

今年度の重点テーマ「小児の入院付き添い」の取組として、滞在者の受け入れはもちろんのこと、滞在者以外も含めた居場所づくり、理解者を増やす養成講座など、24時間365日に及ぶ幅広くかつ寄り添い型の取組に感銘を受けました。健やか親子表彰「団体部門優秀賞」のご受賞にあたり、心よりお祝い申し上げます。

日本労働組合総連合会 総合政策推進局生活福祉局長　**小林 司**

健やか親子表彰 ―企業部門　優秀賞―

株式会社松本山雅

小児入院患者に付き添いをされる保護者の方々へのサポートプロジェクト

活動の目的

小児患者が入院治療を受ける際、未就学児においては常時保護者の付き添いが必要となります。
しかし、その保護者の食事は病院から提供することはできず、保護者それぞれで調達をしなければなりません。調達の選択肢は主に自宅からの差し入れか病院内のコンビニエンスストアで購入の二つとなります。そのうえ、当院入院中の小児患者は松本地域だけではなく信州全域や隣県から来られること、また病院内のコンビニエンスストアで買う場合病棟専属の保育士に子供を預けなくてはなりません。常時5～10人の小児患者付き添いの保護者に対して1人の保育士の配置であるため保育士が1人の子供を預かれる時間は限られてしまいます。

以前から「ママサポ企画」と称して、妊産婦がサッカー観戦できるようにする企画やメンタルヘルス不調を抱える妊産婦や父親母親の無料相談ブースの設置などを行なって参りました。

本課題に対しても2023年から議論・調整を続け、松本山雅FCの選手達に食事を提供するクラブ直営の「喫茶山雅」が定期的に小児患者に付き添う保護者に対してお弁当を届けるプロジェクトを協働することと致しました。お弁当は松本山雅FCの選手達に提供する栄養面を考慮した食材を使用して作っております。またお弁当を届ける際は松本山雅FCの選手も同席し、写真撮影やサインなどを通じて小児患者に付き添う保護者を応援する仕組みとなっております。

具体的な取組内容

クラブ所属の選手と参加者が対面で食事についての現状をお話しいただき、満足な食事ができていない実情をお伺いしました。
その後、子どもたちの病気や容体、付き添う際の大変さなどを保護者の方々からお話しいただき、様々な境遇の方が小児病棟に入院されていることを知りました。
今回の企画をとても楽しみにしていた方や選手への質問を事前に考えてくれていた子どもたちも居て、和やかな雰囲気で座談会が行われました。お弁当の中身については、喫茶山雅シェフから栄養についてはもちろんのこと季節を感じられる食材の採用や彩についてなど食の大切さを交えながら説明があり、シェフからのお話の後、選手より保護者の方々へお弁当をお渡しさせていただきました。
お弁当贈呈後に、子どもたちとの交流を行い、写真撮影やサイン、また松本山雅FCグッズをプレゼントし、楽しい時間を過ごしました。
初回実施の際は、病室から出ることのできない子どもたちの病室へ先生の許可を得て入室し、交流を行いました。
容体も良かったようで、選手との会話もとても弾んでいました。また、この企画を心待ちにしていてくれたそうで、選手に会いたい思いが容体を良くしたと看護師もお話ししてくださり、今回の活動が様々な人に力を与えているように感じました。
企画の反響が非常に大きく、多くの方から活動への協力や活動資金の寄付の申し出などがあり、そのような方々にも様々な方法でご協力・ご協賛頂ける方法を現在検討中です。
検討中のご協賛方法として、選手参加のサッカークリニック・選手プロデュースグッズ・企画チケットなどを検討しています。
この活動が長く継続し、より良いサポートに繋がるように考えております。

健やか親子21表彰　優秀賞

受賞者の声　担当者：上田 将太郎

●取組を始めた経緯は何ですか？

地域課題への解決の為に、様々な取り組みを行ってきましたが、このような課題がある事を相談されてクラブの強みや特色を出して、そして未就学の小児患者の付き添い保護者への環境が改善される取り組みができないかと思い、今回の活動へと繋がりました。

●具体的にどのように取組の普及を工夫しましたか？

この活動を通じて、保護者の方が心身ともに安らげる時間となるように工夫しました。
選手との小児患者とその保護者との交流（サイン・写真撮影・プレゼントなど）
お弁当の栄養面、旬の食材を意図的に使用する、お弁当の蓋を開けた時のインパクトある彩。

●取り組む中で苦労したこと、大変だったことは？

病院・選手・シェフとのスケジュール調整。お弁当をおいしく召し上がっていただくための配慮について。
参加者した方々を楽しませるための内容について。実施日に派遣する選手の選定について。
継続的に活動を実施するための資金捻出のための施策。

●取り組む中で苦労したこと、大変だったことに対して、どのように乗り越えたか

実施する曜日や週をある程度毎月固定して実施。
病院へ行く直前に盛り付けをしてもらい、作り立てに近い状態でお渡しする。
選手がプレイルームにある玩具で子どもと遊んだり、保育士の方がゲームなどを考えてくれたりしている。
子どもの居る選手を選定するなどしている。

●今後の展望・課題は？

協賛金を募り、継続的に活動できる仕組みを構築していきたいと思っています。
協賛金の金額次第では、プレイルームで松本山雅FCの試合観戦ができたり、退院したご家族を試合に招待する事も検討している。協賛金を募る方法として、選手参加のサッカー教室などを検出中です。

評価委員からのコメント

入院治療を要する患児に付き添う保護者にとって、付き添い期間中の食事調達は切実な課題です。株式会社松本山雅は企業の強みを活かして、保護者に届ける弁当の栄養面や彩りに配慮するだけでなく、弁当を届ける機会を患児と保護者の記憶に残るイベントに昇華させることに成功している事例です。

実践女子大学 生活科学部食生活科学科　教授　**佐々木 渓円**

小児入院患者に付き添いをされる保護者の方々へのサポートに着目して、栄養バランスのとれたお弁当の提供のみならず、サッカー選手との交流や体験の機会提供など活動を展開されていることを頼もしく思いました。活動の継続と共に、全国のサッカーチームに呼びかけ、他の地域に取組を広げていただけることを期待します。

NPO法人せたがや子育てネット 代表理事　**松田 妙子**

お弁当の提供やスポーツ選手との交流を通じ、入院中のお子さんと付き添いの保護者を温かく支える活動です。賛同された方たちが支援に加わるなど、社会全体でこども達の健やかな成長を育み、子育て中の親を孤立させない地域づくりにも寄与されています。今後、このような取組が、全国の企業に横展開されることを期待します。

栃木県保健福祉部こども政策課　**鈴木 祐美**

大学病院など小児科病棟の患者さんは長期にわたって入院をされている場合があり、病気の困難だけでなく家族の付き添いなど苦労も伴います。家族に対しての食事の提供や地域のプロサッカーチーム選手の訪問など、子どもたち、家族へと直接届ける支援が高く評価されました。ご受賞おめでとうございます！

北海道医療大学心理科学部　教授　**柳生 一自**

令和6年度　健やか親子21推進本部幹事会

	氏　名	所属等
推進本部会長	岡　明	埼玉県立小児医療センター 病院長
推進本部副会長	川端　伊久乃	日本医科大学付属病院 女性診療科・産科
	上原　里程	国立保健医療科学院 疫学・統計研究部　部長
	大森　和枝	全国養護教諭連絡協議会　常務理事 (栃木県下都賀郡壬生町立壬生中学校　養護教諭)
	岡田　優子	KODOMOLOGY株式会社　価値開発本部長
	奥山　千鶴子	NPO法人 子育てひろば全国連絡協議会理事長
	落合　直美	成城木下病院 師長
	小林　司	日本労働組合総連合会 総合政策推進局生活福祉局長
	佐々木　渓円	実践女子大学 生活科学部食生活科学科　教授
	鈴木 祐美	栃木県保健福祉部こども政策課
	高橋　幸子	埼玉医科大学 助教
	松田　妙子	NPO法人せたがや子育てネット 代表理事
	三牧 正和	帝京大学医学部小児科　主任教授
	柳生　一自	北海道医療大学心理科学部　教授

(50音順、敬称略)

お問い合わせ先

「健やか親子21」事務局

(株式会社 小学館集英社プロダクション)

E-mail:sukoyaka21@shopro.co.jp

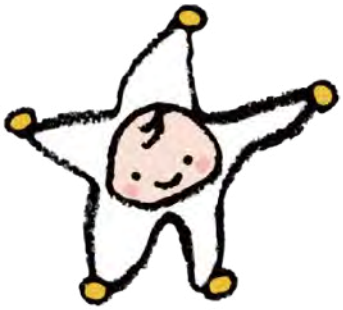
※「健やか親子21」事務局は、こども家庭庁成育局の委託事業の一部として、株式会社 小学館集英社プロダクションが運営しています。

令和6年度

健やか親子21

内閣府特命担当大臣表彰

［受賞取組の紹介］



「健やか親子21」は、「すべてのこどもが健やかに育つ社会」の実現を目指し、
関係するすべての人々、関連機関・団体が一体となって取り組む国民運動です。

詳しくは健やか親子21公式ホームページをご覧ください。

URL **https://sukoyaka21.cfa.go.jp/**

こどもまんなか
こども家庭庁

健やか親子21

── 令和６年度 健やか親子21──

内閣府特命担当大臣表彰

［受賞取組の紹介］